「官能小説～パイズリ短編集」　　イラスト：あんころーど　　文：虹色揚羽

【目次】

■第1話：シスターのパイズリ奉仕.....3 ページ

■第2話：ふたなりの妹×エッチな巨乳美人の姉.....7 ページ

■第3話：白いドレス姿の麗人のパイズリ奉仕.....16 ページ

■第4話：巨乳の皇帝に監禁されてパイズリ奉仕.....22 ページ

■第1話：シスターのパイズリ奉仕

「で、話って何だ？」
　教会にやってきた男は、神妙な面持ちでシスターのほうへ向き直る。鮮やかなステンドグラスに彩られた教会には、二人の他には誰もいない。
「ふふっ……」
　シスターは明るく笑った。黒い修道服姿の若きシスターは、ミルクティー色のふわふわの髪を揺らしながら、男の胸板に両手を当ててぐいぐい押し、壁際まで押しやった。
「ちょっ、いきなり何すんだ！？」
　困惑する男を、シスターはおっとりとした上目遣いで見上げながら、自ら修道服に手をかけ大胆に胸元をめくった。ぷるんっ、と豊満な双丘が飛び出して揺れる。
「私知ってるんですよー。あなたいつも私のおっぱい見ておちんちん硬くしてたでしょ？」
「い、いや、それは……」
「誤魔化しても無駄ですよ。そんなに見たいなら素直に言ってくれればいいのに……ほ～ら、あなたの大好きなおっぱいですよ。遠慮せず、いっぱい見てくださいね～」
　シスターは優しげに微笑みながら胸を張り、自慢の双丘を見せつける。清楚な修道服からはみ出た爆乳がたゆんたゆんと揺れた。

男は茫然として、目の前に晒された爆乳に見入っている。
色白の丸々とした乳房。桃色の乳首がかすかに立っている。大きな乳房の割に、やや控えめな小さい乳輪だ。
その魅力的な爆乳に、男はまじまじと見入ってしまう。股間が熱くなり、肉棒が下着の中で硬さを増していく。
「ふふ……触りたいですかぁ？」
シスターは半目で男を見つめたまま、爆乳に両手をあてがった。そのまま見せつけるように、もにゅもにゅと揉みしだいていく。ハリのある胸に細い指が埋もれていった。
「見てるだけでいいんですか？　ほぉら、触ってもいいんですよ」
シスターのその一言で、男は理性が吹き飛んでしまった。
男は欲望のおもむくままに、目の前の爆乳を両手でわし掴みにする。
「あっ……あぁん♪」
柔らかさを堪能しながら繰り返し揉んでいると、シスターの唇から色っぽい嬌声が漏れた。
「あんっ……んうぅ……」
柔らかい。揉むたびにむにむにと指が食い込んで、手がとろけてしまいそうだ。
夢中になって胸を揉み、乳首にむしゃぶりつく。勃起した桃色の乳首を舌で舐め回す